

証言による『南京戦史』(5)

46期 敵本 正巳



六、紫金山北方地区(右側支隊)の戦闘

佐々木到一少将指揮の右側支隊(歩兵第三十八聯隊、歩兵第三十三聯隊第一大隊、独立軽裝甲車隊第八中隊、野砲兵第二十二聯隊一コ大隊基幹)は、12月11日砲米、堯化門南北高地の敵陣地を突破し、12日から23日にかけて岔路口、岡下付近で優勢な敵を撃破しつつ、紫金山北方地区を経て下関に向かった。

紫金山北方地区における12日、13日頃の戦闘の実態を、参戦者の証言により再現する。

▼佐々木到一少将の私記抄(歩兵第三十旅団長)

△12日夜は到る処に激烈な銃声を聞き、後半夜には砲声さえも聞こえた。しかし、一般の情勢から判断すれば、落城は刻一刻近

本記録係佐々木到一少将の私記抄(歩兵第三十旅団長)の要旨を、本誌記者の筆記に依る。佐々木少将の私記抄(歩兵第三十旅団長)の要旨を、本誌記者の筆記に依る。佐々木少将の私記抄(歩兵第三十旅団長)の要旨を、本誌記者の筆記に依る。

●佐々木少将が戦闘直後、公表を予期せず記したものであることが、私記表紙裏のこの書き込みにより察せられる。違筆である。

づきつつあるので、手許には僅か一中隊の兵力ばかりの手薄だったが、極めて安易な氣持ちになった。

師団司令部との無線連絡によって、師団命令や情報を受取るために終夜を費やし、追撃命令を下達したのは午前6時に近かった。しかし、この間にも、銃声が近距離に起り、銃弾が盛んに壁に命中してくるのであった。

焚火をかき立てて、煤けた寝台に横になり忽ち熟睡、午前8時頃ふと目を醒せば、至近距離で激烈な銃声がしており、通信手や行李の輜重兵、特務兵までが、銃をとってバタバタやっている。

「何事だ?」屋外に走りかけた副官に尋ねる。

「いま撃退したところです。紫金山から真つ黒になって下りてきました」

「敗残兵か?」

「チェックを腰だめで撃ってくるのです。それが何回も何回も、五、六百が一緒になって」

「鉄砲を取りあげろ」

「降伏なんかするもんですか、皆殺してくるわ、あっちにもこっちにも、実に夥しい敵兵である。彼等は紫金山頂にあった教導師の兵で、血路をわが支隊の間隙に求めて、戦線を逆打って出たものであった。

銃声の間に怒号罵声すら聞こえてくる。家屋に立て籠っていつまでも抵抗するもの、いち早く便衣に替えて逃走をはかるもの、そして三々五々降伏する者は、必ず銃器を油の中に投じ、あるいは家の中に投げこんで放火していた。この点は実に徹底していた。当面の敵は、蔣介石が虎の子のようにしていて師団だけあって、最後まで最も勇敢に戦ったようであった。

以上は一局部の紛戦状況であるが、支隊の第一線部隊は13日払曉前、敵陣地に突入し、つづいて敵を急追した。軽裝甲車中隊は午前10時頃、また下関に突進し、江岸に網集し、あるいは江上を逃れる敗敵を掃射して、無慮一万五千発の弾丸を射ち尽くした。

司令部は予備隊たる歩兵一中隊をもつて、左及び後方より突撃したる敵と前後に至る激戦を交え、通信兵、輜重兵、伝騎の後方を追及し道路不良に悩みつづけた野砲兵大隊は、これまた夜間敵の襲撃を受け、掩護の歩兵一中隊、工兵一小隊とともに、零分面射撃をもって敵に応戦、四時間の久しきにわたって応戦。

さらに、その後方には後衛として残置した歩兵二中隊が、夜半以後、二方面より反復殺到する敵部隊と戦闘を交え、これを撃滅した。さらにその後方、衛生隊付近に集結した敵部隊が位置していたが、暗黒の裡に敵の襲撃をうけて部落内に突入せられ、人二百、馬六十の損害を蒙るが如き失態を演じている。

この騎兵や、その後方にあった重砲も盛んに増援を請うてきたが、自衛力を有する者を顧みる暇は無かった。蓋し、予の部隊は数里の長きにわたって延伸し、側面にたつたからである(ゴシツク・筆者)

▼窪田政夫氏の証言(歩兵第三十八聯隊第一中隊小隊長、49期) 【筆者注】

窪田氏は今日まで保存されていた「南京

窪田氏に送られた私信」と太平庄から南京の下関に至る聯隊行動経過要図を基礎にして、次のように証言された。

△12月13日、岡下の戦闘 岡下の戦闘は、敵との不期遭遇戦であった。私の第十一中隊は野砲兵大隊の護衛中隊から溢出して現われ、野砲は急遽、陣地を占領して零距離射撃で榴霰弾を浴びせ、交戦約一時間余で、敵は多数の死体を残して四散した。

この敵は、上海方面から敗走してきたものか、紫金山から敗退して脱出を試みたものか、あるいは南京城内から脱出した敵であるか不明であったが、私にはどうも、上海方向から敗走してきた敵ではなかったと思われた。

12月14日 私の中隊が下関に進出した時には、既に先着の歩兵部隊が居り、私たちは城内に進入しなかった。下関に先着していた部隊は、恐らく歩兵第三十三聯隊ではなかったかと思う。

聯隊は15日朝、紫金山東方の仙鶴門嶺に引き返して、南京の東部方面の警備に任じた。初太郎大尉、先年病死した敵(中隊長、土井近を警備中、多数の俘虜を捕えた。この俘虜は、ならん戦闘を交えず投降してきたのであるが、17、18日頃、南京の刑務所に護送した。俘虜の数は約二千人内外であり第九中隊第二小隊長吉村文作少尉が護送の任務についたと思う。俘虜護送のために各中隊から一コ小隊を差し出し、約百二十名ぐらゐであった。

【筆者注】

歩三八戦闘詳報第十二号附表(後掲)によると、「俘虜七二〇〇名(将校七〇、下士官兵七二〇〇名)は、14日午前8時30分頃、堯化門附近を警備中の第十中隊に白旗を掲げて前進し来り、午後1時、武装を解除して南京に護送した」と誌している。

筆者は、窪田氏に「俘虜収容の日時と俘虜

「虜の敵」について再度問い合わせたが、「14日か15日定かでないが、同一の俘虜である。俘虜の数は、護送要員数からみても、七二〇〇名は過大であり、せいぜい二、三千名が妥当な数ではないか」と述べられた。

また、吉村文作氏（奈良県北葛飾郡都広陵町）に俘虜護送の状況がわかったが、同氏からは「現在病後、療養中の身であり、与えられた余生を大切にすることに専念し、他のことは一切考えないことにしております……」というお便りをいただいた。事変当時、勇戦された第一線将士も多くは、死亡、病弱、高齢となられ、一抹の寂しさを覚える。

▼児玉義雄氏の述懐（歩兵第三十八聯隊副官 33期、八十五歳で敬虔なクリスチャン）

聯隊の第一線が、南京城一、二キロ近くまで近接して、彼我入り乱れて混戦していた頃、師団副官の声で、師団命令として「支那兵の降伏を受け入れるな。処置せよ」と電話で伝えられた。私は、これほどでもないことだと、大きなショックをうけた。

師団長・中島今朝吾將軍は豪快な將軍で好ましい御人柄と思っておりますが、この命令だけは何としても納得できないと思っております。

參謀長以下參謀にも幾度か意見具申しましたが、採用するところとならず、その責任は私にもあると存じます。部隊としては更に驚き、困却しましたが命令やむを得ず、各大隊に下達しました。各々大隊からは、その後何ひとつ報告はありませんでした。激戦の最中ですから想像いただけるでしょう。

▼仙鶴門鎮の敵襲と投降捕虜
（独立攻城重砲兵第二大隊第一中隊、観測班長、砲兵中尉沢田正久氏の証言）
▲第一中隊（十五センチ加農砲）の任務は、

太平門に突進する佐々木支隊（38ミ基幹）に協力することであったが、南京が陥落した12月13日、仙鶴門鎮付近で「首都防衛決死隊の夜襲」をうけ、かつ多数の投降捕虜を得たので、その状況を略述します。

なお、小戦例集についても記載されています。12日夜、南京城壁の一部が占領されるや、敵の一部は紫金山北側を経て、東方に脱出をはかり、仙鶴門鎮および新庄付近を夜襲したのであります。当時、同地区には集成騎兵隊（三〇師団の騎兵聯隊から抽出）だけで、歩兵中隊は居りませんでした。

中隊主力は12日、仙鶴門鎮北方約二キロの墓地に陣地進入して放列を敷きましたが、その横の道路を佐々木支隊が前進して行くのを目撃しました。私は観測隊長として、墓地北々西約一キロ、高さ約五〇メートルの揚山に観測所を設け、観測任務につきました。

12月13日この方面では戦況を認めず、私は乗用車で、佐々木支隊の進路を追って、南京城東北端を目指して一本道を前進しました。約四キロほど進んだところで、左右から銃撃をうけました。この付近の地形は見通しがきかず、敵情全く不明、佐々木支隊の兵を見ず、これ以上の西進は危険と、もとの観測所に帰りました。

夜になり宿営の用意に取りかかりました。当夜は真っ暗でしたが10時過ぎ、遙か西方から敵の大集団らしい喊声、チャルメラ、迫撃砲の音が聞こえ、われわれに迫ってくる。

直ちに陣地に展開しましたが、これは射撃のためではなく、自己防衛のためで、暗夜のたためにはなく、一切禁止されました。やがて仙鶴門鎮付近で夜間戦闘が展開されましたが、数時間の白兵戦のうち、敵の主力は再び引き返していききました。この間、私どもの陣地には敵名の敵の襲撃を受けただけでした。

12月14日——夜明けの道路上には、敵の中尉が死亡しているのを発見しました。連絡將校らしく、通信紙には、刻々とあわただしい敵軍の動きをうかがわせる命令が記入されて

いました。私は捕虜俊彦中隊長とともに、自動車で仙鶴門鎮へ走り、部隊を点検しました。が、庄野吹一少尉以下火砲、人員ともに健在を確認しました。周辺には敵の屍体が果々と横たわっていました。私は中隊長とともに中隊陣地に引き返しましたが、衛兵所よりの四、五〇メートル先に敵の斤候らしい者三名を発見し直ちに撃退しました。

それから一時間ぐらいて午前8時ごろ、衛兵所に行ってみると、驚くなかれ、揚山に向かつて西方から続々と敵の大部隊が登ってきます。中隊長に報告すると、中隊長は「友軍ではないか」と疑ったほどでした。直ちに全員分散展開、このとき早くも放列付近には敵の弾雨が集中しはじめました。中隊長の命令により、わが方は取りあえず火砲一門を操作、威嚇のため、零分画射撃を行いました。

敵は山の反対斜面に移るとともに、稜線上の観測隊に向かつて、チェコ機関銃で盛んに射撃してきましたので、われわれは基地を利用して、接近する一部の敵と相対しました。

やがて友軍増援部隊が到達し、敵は力尽き、白旗を掲げて正午頃投降してきました。その行動は極めて整然としたもので、既に戦意は全くなく、取りあえず道路の下の田圃に集結させて、武装解除しました。多くの敵兵は胸に「首都防衛決死隊」の布片を縫いつけていました。

俘虜の数は約一万（戦場のことですから、正確に数えておりませんが、約八千以上おつたと記憶します）でしたが、早速、軍司令部に報告したところ、「直ちに銃殺せよ」と言

って来たので拒否しました。「では中山門まで連れて来て」と命令されました。「それか不可」と断わつたら、やつと、「歩兵四〇中隊を増援するから、一緒に中山門まで来い」ということになり、私も中山門近くまで同行しました。

この「首都防衛決死隊」は、重機関銃、迫撃砲を中心に装備され、正規兵の外に一般市民の志願兵（大学生など）もかなり加わっていました。全員軍服姿でしたが、英語を話す

者、プロニングの肩掛け大型拳銃を持って居る者も居り、集団行動は、よく統制がとれていました。さて、この首都防衛決死隊の行動をどのように判断したらよいでしょうか。

この敵の大部隊は、城内に布陣していたのではなく、紫金山を拠点とする重層陣地に配備されていた部隊が、日本軍の間隙を縫って、罫目を破って東方に脱出を企図したのと思われまふ。当時、日本軍は南京一番乗りを競って維をもむように突進し、面的制圧でなかつたので、紫金山北麓一帯には多数の残敵が潜在（残存）したのと思ひます。

仙鶴門鎮には集成騎兵隊（三〇師団の騎兵隊）が居り、戦闘の主役は多数の残敵が潜在（残存）したのと思ひます。騎兵隊で前哨中隊長は陸士45期前後の方だったと思ひます。また、この投降捕虜を引き渡した歩兵部隊名は思い出せませんが、麒麟門付近に待機していた軍か師団の予備隊から派遣されたものと思ひます。

なお、戦闘間に約千名がキム山（キムの漢字は忘れました）に逃走し、山中に潜伏して最後までゲリラ戦を戦つたようです。このキム山系は、南京・鎮江の間で鎮江寄り、揚子江南側の山系で、私は昭和13年5月ごろ、キム山の掃討作戦に参加した記憶があります。

ちなみに、私が陸士を卒業する直前の昭和12年6月、市ヶ谷の大講堂で飯沼守生徒隊長21期から記念講演「捕虜の取扱ひについて」を聞き、捕虜は丁寧に取扱わねばならないと教えられました。その生徒隊長は、いま、上海派遣軍の參謀長であります。卒業後僅か五

カ月の今日「直ちに銃殺せよ」とは、一体誰が決定し、誰が命令を下したのか。当時、私の胸が痛かった印象は、従軍中とはより今日に至るまで、私の脳裡から離れません。

この戦闘は「小戦例集」第四輯第三十六（砲兵）に掲載されている。それによると、「13日夜半約五千の敵が、仙鶴門鎮の集成騎兵隊、攻城重砲兵第一中隊の一門を夜襲

【筆者注】

し、翌14日8時、砲化門南方の揚坊山、新庄(攻城重砲兵第一中隊主力)に約二、三千の敵が来襲。12時頃約七千名が砲化門付近において投降せりと誌されている。

▼捕虜一万の投降(第十六師團司令部副官・宮本四郎氏の遺稿)
▲紫金山の攻撃前、佐々木支隊(381基幹)は紫金山と揚子江の間を下関に向かい退路遮断に任じ、多大の戦果をあげた。

紫金山を占領し、師團正面の主な戦闘が終わり、城内進入態勢が整った午後3時ごろであったと思ふ。

歩兵の下士官が後方からやってきて、敵一万がやってくるから、至急増援の兵を出してくれという。どうして後方に歩兵一ヶ中隊がいたか判らないが、恐らく佐々木支隊が下関に突進している時、遠くに分遣されて遅れたのであろう。その歩兵中隊長の報告である。

降って湧いたような話である。師團長はこれ聞いて、「一万の敵、そんなものが一目でわかるはずがない。デタラメを言うな」と言われたが、私もそう思った。

その時、師團には手持ちの兵力はなかった。どうにも手当ての方法がない。仕方がないので衛生隊の武装兵を出し準備をしていると、再び後方から伝令がきて「敵は全部捕虜になった」という。

これもまた、狐につままれたような話であるが、私はその時「一万の捕虜をどのように収容するか」を考えなければならなかった。

南京城内には刑務所があるから、そこに入れるとしても食わせるものがない。我々自身がイカモノを食いつつ、その日を過ごしているのに如何ともなし難い。しかし、人間は水さえ飲んでいれば十日や二十日は保つというから、食飼のことは何とかなるだろう。

参謀長に指示をうけようとしたが、参謀長は即座に「捕虜はつくらん」と言われたので、後方参謀に話した。

暫くすると、紺色の服をきた捕虜が、四列縦隊でゾロゾロやってきた。司令部は少し高

いところにあつたので、その縦隊の長さがわかつた。二キロぐらい後方の森から続いている。森の背後のことは判らないが、統々と森から出てくる。一万という報告は嘘でなかつたと思つた。これからはみんな報告に来た中隊が護送して、とにかく城内に向かう。

戦意を失い、指揮系統をなくした軍隊は情けないものである。僅か百五十名ぐらいの一中隊に降伏したのである。

来たのであろうか。
揚子江南岸に鎮江という市街(南京東方約六十キロ)があるが、街の近くの高地には恰好の陣地が構築されていた。第十三師團がこの敵を攻撃したが、その時機にはわが師團は既に南京を包囲していた。鎮江の敵は退却して南京に入るつもりであつたのが、南京は既に日本軍に包囲され、硝煙天を覆う情景を見て、帰るところがない浮草となつたのである。

この日の夕刻、司令部はさらに前進して中山門外の郵便局に入って夜を過ごし、軍の統制による入城を待った。この頃、騎兵第二十聯隊がようやく追及してきた。――(中略)――

第一線部隊は斥候のような形式で、ドンドン城内に入つていった。追撃すれば当然第一線は城内に入らざるを得ない。▽

右側支隊(紫金山北方) 戦闘の考察(筆者)

一、粉戦下の投降兵と戦場心理について
右側支隊の砲化門附近から紫金山北麓地区における12月12日・13日の戦闘は、佐々木到一少将、澄田政夫氏、児玉義雄氏の証言によると、彼我入り乱れたの粉戦の様相を呈した。敵と相まみえた瞬間、突嗟に襲いかかる。第一線の戦闘者にとつては、敵を倒さなければ、それは自分が殺されることを意味する。動くものには直ちに発砲する。それが戦場の常である。

手をあげて来る敵兵に抵抗の意志があるか無いかをいちいち徐ろに判断し、国際法に照らして捕虜として取扱う余裕はなかつた。後に批判の余地は残るにせよ、これが粉戦に巻きこまれ苦悶する第一線の偽らざる実態であつた。

かりに、このバラバラと投降してくる敵兵をいちいち捕えていたとすれば、日本兵全員が後送に当たつても兵力が不足したてである。それでは任務にしたがつて前進することはできない。下級指揮官としては、ひたすら下関に向かって突進する以外にとるべき道はなかつた。

ただし、敬虔なクリスチャンである児玉聯隊副官や、第一線後方に陣地占領して大攻城重砲兵の若き沢田少尉が、投降兵の処置を軍や師團に問い、「処置せよ」、「銃殺せよ」の命令をうけ、強いショックを受けたことを述懐している。湯水鎮の軍司令官は散兵に襲撃されはしたものの、比較的冷静な立場にある軍司令部や中島師團長が、なぜ、このような不当な命令を出したのであろうか。なお検討してみたい。

4月号掲載の本戦史企画の方針(下段)の通り、公正な証言として、率直に記録に止めるものである。

これに反して、砲化門付近の集団投降俘虜は収容して、南京城内に護送している。沢田正久氏の証言による仙鶴門鎮付近の投降俘虜九千(小戦例集では砲化門付近で約七千名投降)と、宮本四郎氏の約一万名の俘虜は、恐らく同一のものであろう。

ただし、この投降兵は沢田氏は紫金山守備の「抗日義勇軍」といひ、宮本氏は鎮江守備隊の散兵と推察している。

また、佐々木少将、澄田政夫氏の述懐によると、集成騎兵隊が戦約し、歩三八・第十中隊が砲化門で収容した約七二〇〇名の俘虜については、「小戦例集」の記述や、歩三八戦例詳報第十二号附表と一致するので、これらを総合判断すると、日時、収容場所、戦闘経過、俘虜数などからこれらは同一の俘虜ではないかと推定する。

「会員諸賢に」 4月号掲載
題して「証言による南京戦史」。文字通り、真相を知る参戦者の体験を主軸としてまとめあげた「戦史」であります。

参戦部隊の作戦行動の基本は確實な戦史資料に根拠を求め、できる限り部隊の戦闘行動を細かく明らかにしようとするものであります。関係部隊の行動の細部を明らかにする公的史料は、現在充分には存在しません。これを補う途として、従軍者の証言によつたわけでありませぬ。

敵本君は長期に亘る自身の研究の上に、会員各位はもとより部外の方々からの指摘や資料を得て、ここにこの事件の全容を纏め上げられました。

その作戦・戦闘の特異性ともいふべき事象を明らかにし、ついで何時、何処で、どんな戦闘が行われたか、個々の事象を分析しつづ、組み立て総合して南京で何が行われたかを明らかにする手法をとつています。

今日、肝心の日本軍の側から、事件の全貌を総合研究したものが皆無であることを考えると、この論稿がこの事件を論ずる資料として、信頼するに足る戦史書であることを確信し、期待しているわけでありませぬ。

われわれの立場は、「実際に何が行われたいせよ」当時の従軍者が日々になくなる現状において、今にしてその真相を探るのでなくては、遂にその究明の時機を失すのではないかと、この考えからであります。(加登川記)

しかも、この俘虜群約七千名は16日頃南京城に護送され、佐々木元勝(野戦郵便局長)が16日夕刻、中山門付近での護送俘虜群に出会つていたのである。(後掲)

ただ、抗日義勇軍であるか、鎮江からの敗走部隊であるかの判断が分かれて

いる。この俘虜群約七千名は16日頃南京城に護送され、佐々木元勝(野戦郵便局長)が16日夕刻、中山門付近での護送俘虜群に出会つていたのである。(後掲)

で、これについて考えてみたい。
沢田氏は、多くの兵は胸に「首都防衛決死隊」の布片を縫いつけ、正規兵の外に大学生などの志願兵が混っていたというから、紫金山守備の教導師ではなく、混成部隊であると考えられる。

中国の『抗日戦史』によると、鎮江守備の江防軍は、第一〇三師、第一二二師および要塞守備隊であり、この二師は江陰要塞で攻防五昼夜の激戦の末、鎮江に後退してこれを守備している、師団の兵力は激減していたと推定される。

この鎮江要塞は第十三師団主力と天谷支隊(11D)が12月8日に攻略した。従って宮本氏が推測しているように、鎮江から敗退して12月13日頃、紫金山北麓に辿りついた中国軍が、南京城に入ることができず、東方に脱出をはかったものであったかも知れない。

いづれにしても、沢田氏と宮本氏、澄田氏とは意見が若干異なるのであるが、第十六師団參謀長中沢三夫氏、派遣軍參謀總長計氏の述べ(後掲)では、17日頃約三、四千の俘虜(人数が若干違ひ)を、麒麟門付近から中山門を経て、南京城内刑務所に護送している。

以上のように、集団投降俘虜の数については、一万〇三、四千と大きな差があるが、仙鶴門鎮(堯化門)付近での投降俘虜は、南京城内に護送され、収容されたことはほぼ確実である。

三、「郊外處殺五万七千」説について
東京裁判において中国人、魯姓は次のように証言している。
「敵軍入城後、将二退却セントスル国軍及び難民、男女老若合計五万七千四百十八人ヲ、幕府山付近ノ四、五箇村ニ閉ジ込メ、飲食ヲ断絶ス。凍死死亡スル者頗ル多シ。12月16日ノ夜間ニ到リ、生残レル者ハ、鉄線ヲ以テ二人ヲ一ツニ縛リ、四列ニ並バシメ、下関、草鞋峽ニ追ヒヤル。然ル後、機銃ヲ以テ悉ク之ヲ掃射シ、更ニ又、銃剣

ニテ乱刺シ、最後ニハ石油ヲカケテ之ヲ焼ケリ。焼却後ノ残屍ハ悉ク揚子江中ニ投入セリ。」
この証言は南京占領後の16日夜の出来事としているが、佐々木支隊(38I)の戦闘、警備と関係するので、若干の考察を述べる。

(1) 日時が不審である
魯姓は12月16日というが、南京軍事法廷では12月18日となっている。当時、入城部隊は15日に掃蕩を終わり、16日は明17日の入城式を準備していた。18日は城内飛行場で合同慰霊祭が行われた日である。

(2) 総人数は誰が、どのようにして調べたか
端数まで示している。当時の混乱した状況下で、どうやってこれだけ正確な数を調べることができたのであろうか？

(3) 当時の南京の気温は凍死するほどの寒さではないし、三、四日で餓死するはずもない。本多勝一著『中国の旅』278、279ページでは陳徳貴氏は、「揚子江の水中に二日二晩、頭だけ水上に出して逃げまわった」と述べているのではないか。

(4) 二人を一組に鉄線で縛り云々は、いささか異様な記述ではある。
このように、魯姓の証言は信用しがたいものではあるが、私には佐々木支隊の戦闘と関係があるように思えてならない。

佐々木支隊は堯化門から岡下付近で紛戦を交へて、紫金山北方地域、煤炭山、幕府山南側地区を前進して下関に突進した。この間に、逃げまどう中国軍を撃破したことにおいて、佐々木到一少将の私記抄、聯隊副官・児玉義雄氏の述べなどから推察される。

隊戦闘後の戦場の跡を見聞して、後日、都合の良いように構成された証言とも私には思えるが、盲断にすぎるのであろうか。

七、中国軍の崩壊と城内の恐慌状態

中国軍の崩壊——楔入突進による紛戦の交錯
南京防衛軍の崩壊を決定づけたのは、12月8日から12日にわたる外郭陣地の攻防戦であった。

8日、南京防衛の前哨線を突破した日本軍は、「南京一番乗り」をめざして夜間追撃を敢行し、敵陣地の間隙を縫って「楔入突進」し、各師団は統長の態勢をもって逐次戦闘に加入した。そして、陣地に拠つて頑強に抵抗する中国軍との間で激戦が交えられたかたわら、退却する中国軍や逆襲に転じた中国軍との間で、「紛戦・混戦」様相を現出したこと

は前述のとおりである。
夕暮れ時、カーキ色の軍服を着ているから、友軍と思つて近寄つたら敵であつたとか、逆に中国兵が日本兵を味方と間違えて、手招きしたり、近づいてきたという状況がしばしば起こつた。11日には湯水鎮の軍司令部が、不意に激しい敵中国軍の攻撃にさらされ、狼狽したことは戦史に有名な話である。

このような混戦・紛戦の戦場様相のなかで、中国軍は甚大な損害を蒙り、指揮組織は崩壊し、小グループごとにバラバラになつて、日本軍の間隙を縫って退却する者、地の利を生かして山あいに潜伏する者、便衣に若替えて離隊し、あるいは武器を捨てて投降を申し出た者もあつた。

日本軍の最前戦隊部隊は、小グループの投降兵などを応接する暇はなく猛進をつづけ、集団で白旗を掲げた捕虜は、収容して城内に護送した。前述の如く14日頃、仙鶴門鎮(堯化門付近)付近で約七千—一万の投降捕虜を収容し、15日には山田部隊が幕府山砲台付近で一万四千余の捕虜を得た(この捕虜は、後日、非戦闘員を釈放して実数は約八千

余といわれる)。この間、南京城内においては、敗走する中国兵と逃げまどう難民によつて掠奪、暴行の恐慌状態が現出していたのである。中国軍側の記録、ダーディン記者のレポート、当時の東京日日新聞の報道記事ならびに参戦者の証言などにより、中国軍崩壊の過程と城内の恐慌状態を回想してみたい。

中国側の記録——南京付近の戦闘
錫澄線(無錫—江陰の線)を突破した日本軍は、①金壇—天王寺道、②無錫—丹陽—句容道、③江陰—鎮江—橋頭鎮道の三路におかれて南京に向かい進軍した。太湖以南の日本軍は、呉興を占領した後、長興から二方向に分かれ、①広徳—宜城—蕪湖道、②宜興—溧陽—溧水道を南京に向かい進軍した。

空軍は連日爆撃をくりかえし、海軍艦艇は揚子江を溯航し、陸軍に協同して、南京を包圍し、12月6日には概ね、宜城—何家鋪—秣陵—淳化鎮—湯山以東の線に進出した。

12月7日、敵は全線をあげてわが陣地を包圍攻撃し、同時に海空軍機は猛烈な爆撃を加え、艦砲も大挙して射撃を加えた。わが守備隊は勇戦抵抗したが、犠牲続出し、翌8日には秣陵岡、淳化鎮、湯山が相次いで陥落し、敵は迫近してわが復讐陣地に迫り、わが軍は苦戦して激戦三昼夜に及んだ。

わが第八八師の二六二旅長・朱赤、三六四旅長・高致嵩は、雨花台において忠勇、国に殉じた。第八七師の二五九旅長・易安華は、玄武湖において奮戦して陣歿した。

12日午後、雨花台、工兵学校、紫金山の各要地は次々に陥落し、城内は敵砲兵の火制下におかれた。そして、中華門には敵の一部が突入し市街戦が起こつた。光華門、中山門も相次いで突破された。一部の敵は蕪湖を占領し、揚子江を渡江した敵の一部は浦口に進出し、わが軍は完全に包圍下に陥つた。

南京防衛司令官唐生智は、戦局挽回の方策なしと判断し、かつ部隊の戦力を保持するため、南京を放棄して各部隊ごとに包圍を突破するように命令を下達した。わが憲兵副司

令・蕭山令、第一五師參謀長・姚中英、第一六〇師參謀長・司徒非、第五七師・李副長らは、包圍突破にあたり戦死し、南京は遂に13日陥落したのである。

【抗戦簡史】「抗日戦史」による

デーデン記者の記録——城内の恐慌状態
△9日、日本軍が光華門から攻撃を開始したとき、南京全市は恐怖につつまれた。城壁周辺の到るところが煙に覆われ、安全地区には難民があふれ、街路には兵士や市民がひしめき合い、全市に戒厳令が敷かれ、日本軍の空襲は終日続いた。
10日、11日の二日間、中国軍は日本軍の猛攻を、命と引きかえに持ちこたえ、軍団の大半は10日には城内に撤退していった。

△城門はすべて内側から土壌とコンクリートで固められ、重要な門には狭い通路のみを開けておいた。陥落後、記者は中華門と光華門を視察したが、門そのものが突破された形跡はなく、中国軍のバリエード作戦は有効であったことを証明した。日本軍が最初に城壁内に入ったのは、門を通つてではなく、城壁に梯子をかけてのりこえたのであった。
12日、日本軍は最後の集中砲火を浴びせて、一斉に中華門・光華門・中山門・紫金山へと躍りこみ、重火器は一斉に城壁に銃弾を射ちこみはじめた。

△中国防衛軍のなかには、明らかにヒステリー症状がみられはじめた。もはや袋のネズミとなつて、死ぬほかないという気分が一般化したつあつた。中国軍人による市街、商店からの掠奪も、12日には一般化した。

自分の命を守るだけが精一杯で、わが家はどうなるかという心配は、もはや市民の間にはなかつた。掠奪の主なもの、食糧品などの必需品だつた。南京市内には、まだかなりの食糧品のストックがあつたが、防衛隊の士気は目に見えて低下していった。

本格的な撤退陣が始つたのは12日からである。八八師の一部がこれを食い止めようとしたが、最早それは不可能だつた。13日になると、それは途方もない大混乱となつた。

△12日の夕方、彼等は安全地帯に充ちあふれ、数千の兵士は軍服を脱ぎはじめた。民間人の服を盗んだら、通りがかりの民間人に頼んでわけてもらったが、どうしても「非戦闘員」に化けきれない兵士は、最後には軍服を脱ぎすて、下着姿となつた。持っていた武器は、軍服と一緒に投げ捨てられたので、街頭には銃や手榴弾、軍刀、ナックザック、コート、軍靴、鉄カブトが山積みされた。特に、下関付近に捨てられた軍需品の数は、驚くほど大量だつた。通信省前から二区画にわたつて、トラック、大砲、バス、乗用車、荷馬車、マシンガンの類が、まるでガラタタ置場のよう

に散乱していた。そして12日の深夜には、南京市が誇る豪華な建物の通信省に火が放たれ、中に貯蔵されていた弾薬は、物凄いな音をたてて、数時間にわたつて爆発を続けた。火はやがて付近のヒミ山に燃え移り、この火は翌日も燃えつづけた。荷車を引いていた馬も火焰に包まれ、この馬のいななきが、周囲の情景を一層あわただしく、痛ましいものにした。これらの破壊や火災は、下関に通ずる中山路をふさぎ、これを避けようとして横道に入る人達の混乱を一層ひどくした。

中国軍部隊のうち、数千名は下関に辿りつくくと、数少ないジャンク、ランチを使って揚子江の向う岸に着くことができた。しかし、この途方もない「パニック」のため、揚子江で溺死するものも沢山あつた。

△13日、ある中国軍団は南京東部と北西部とで、なお日本軍と戦火を交えつづけていた。(注・南京東部の太平門・和平門正面、歩兵第三十三聯隊と北西部の漢西門方面、歩兵第四十五聯隊との戦闘であらう。)しかし、城内に閉じ込められた中国軍の大多数は、もはや戦う氣力を失ひ、数千名

の兵士が、武器を捨てて、安全委員会に出頭した。委員会は、当時日本軍が捕虜を寛大に扱うものと信じて、彼等の降伏を受理した。その頃、日本軍は下関地区に進出し、南京を完全に包圍してしまつた。下関地区で逃げおくれた部隊は捕えられ、組織的に掃蕩された。

13日夜遅くまで、南京城内での散発的な小ぜり合いがあつたが、日本軍は南部、南東部、西部地区を制圧した。そして、14日昼までには、なお武装して抵抗していた中国兵士は完全に排除され、かくて日本軍は、南京をその手の中に入れたのである。
南京閉鎖、戦標の一ヶ月(一外人の日記)
昭和12年12月20日「東京日日新聞」より
心臓を射る我輕氣球、正確彈雨に敵將茫然、巷を罩める血と藥臭

11月25日——戦死傷者の南京に後送されるもの極めて多く、南京は戦死傷者の收容所と

化し、全市に医薬の香煙漫し、移転後の政府機関は勿論、私人の邸宅も強制的に病室にあつた。南京は男の町、軍人の町と一変した。
12月3日——日本空軍の飛米激しく、連日空襲しきりにして、市民は恐怖にふるふる。

12月7日——蔣委員長は早朝、飛米機で遂に南京を去る。蔣委員長は都落ち伝はるや、全市民は家財を抱へて避難民区になだれ込む。
12月8日——馬南京市長ら、また南京より逃げ出し、南京付近は四方に炎々たる火災起り、市内また火災あり。
12月10日——紫金山麓あたりに日本軍の輕氣球空高くあがり……着弾の正確なること驚嘆のほかなし……南京死守三ヶ月を市民に契約した唐生智を初め將士は、いづれも茫然として。
【注】「小戦例集」氣球観測による交通遮断射撃。
△12月13日、独立氣球第二中隊は、中山陵

南京閉鎖の三ヶ月
一外人の日記

心臓を射る我輕氣球
正確彈雨に敵將茫然
巷を罩める血と藥臭

米輿論冷靜大統領満足
海軍示威考慮せず

米輿論冷靜大統領満足
海軍示威考慮せず
米輿論冷靜大統領満足
海軍示威考慮せず

下の標高84付近に陣地を占領し、独立攻城重砲兵第一中隊の射撃に協力した。

下関上流、三叉河付近の江上に小型汽船六隻、民船約五、六十隻に分乗、退却せんとする敵を発見して射撃し、汽船二隻、民船二十隻余を顛覆せしめたり。城内の避難民は、射撃禁止区域なりき。

12月12日——城外の支那軍総崩れとなり、八七師、八八師、教導隊は、学生抗日軍を残して市内にだれ込み、唐生智は激怒して、彼が指揮する三六師に命じ、これら敗残兵を片っぱしから銃殺するも、大勢如何ともする能はず、夜八時頃、憲兵とともに何処ともなく落ちのぶ。(ゴシック、筆者)

▼佐々木元勝氏の日記(上海派遣軍の軍事郵便長で「野戦郵便旗」の著者) 12月16日午後、中山門より入城した佐々木元勝氏は、城内で見た状況を次のように述べている。

△本通りの軍政部から海軍にかけ数町の間は、まことに驚くべき阿鼻叫喚の跡と思われた。死体はすでに片づけられたの少ないうが、小銃や鉄力ブト、衣服が狼藉をきわめ、ここで一、二万の支那兵が一時に掃射されたかと、思われるばかりであった。これは支那兵が軍服を脱ぎすて、便衣に着替えたものらしくもあつた。(ゴシックは筆者)

安都廉彦氏の証言(歩兵第四十七聯隊連射砲中隊長、46期) * 「私は聯隊の速射砲中隊長として参加しました。南京攻略戦の状況は、『南京作戦の真相』(熊本第六師団戦記)や『郷土部隊奮戦記』(平松廉史著)に詳しく記述されています。

私の中隊は南京城壁の銃眼射撃をして、第一線部隊の城壁頂を直接支援しました。聯隊は砲兵・歩兵砲の全火力を集中して、中華門西方約三百メートルの城壁に突

撃路を開設し、12日12時すぎに登頂に成功しました。

その後、12日より19日まで蕪湖に転進開始するまで、中華門城外の部落に駐留したが、13日より17日の入城式までの間、一部の兵力を城内の四畝井高地周辺に派遣して城内掃蕩を行なった。

掃蕩部隊から聞いた話では、便衣の敗残兵は、ほとんど退去した跡であり、掃蕩といつても遺棄された軍需品の収集や跡片づけが主な仕事であつたとのこと。

その全体はわかりませんが、第九中隊の陣中日記によると、「各種弾薬数万発、青竜刀数十本、軽機・重機数百挺、小銃六百挺、迫撃砲数門、毛布、天幕、軍服など遺棄されたもの多数」と誌してあります。遺棄された軍需品は多数であつたと記憶しております。(ゴシックは筆者)

日本軍の入城によって、城内が恐慌状態に陥り日本軍によって放火、掠奪が行われたのではない。13日の日本軍入城時は、中国軍総撤退の後であり、城内に遺棄された多数の軍服、兵器の山や、火災・掠奪の惨状は、南京陥落前に、軍紀が崩壊した中国軍によるものであつた。 △未完了

南京攻略前後 柳田部

●今月号では、「蔣介石ヲ對手トセズ」声明を決定した昭和13年1月15日の政府大本営聯絡会議前後の様相を、堀場少佐の直接の上司であり、戦争指導、作戦の当事者であつた参謀本部第二課長河辺(虎四郎24期)少将の回想録を中心にたどつてみましょう。(下村定20期第一部長は病氣休務中) これは、声明2年半後の昭和15年7月、大本営研究室員であられた竹田宮恒徳王殿下が河辺少将から「直接聴取セラレタル事項」の二九四ページにわたる速記録で、現在、戦史部に保存されています。



河辺 次長(多田駿)から伺つた話であります。最後の時に米内海相が次長に対し「結局、参謀本部は支那側に誠意なしと断定せられぬのは外交当局たる外務大臣の判断と異なるものであつて外務大臣の判断を基礎として国策を進めて行くべき政府と反対の意見である」と云ふことになる。即ち参謀本部は外務大臣に対し不信任といふことと同時に政府を不信任といふことになつた。さうすると統帥部と政府との意見が違ふといふことと戦争指導を統帥部と手を取つてやつて行けない。従つて政府は辞職しなければならぬといふことになつた。と言はれたのであります。

次長は此の時「明治天皇は朕に辭職なしと仰せになつたと聞いて居るが、此の重大時期に政府の辭職々々となつた等がお考になる氣持が判らぬ」と声涙共に下つた場面があつたのであります。 さういふ悲劇までありましたが結局総務部長(中島鉄蔵)第二部長(本間雅晴)も同席協議の結果、此の際統帥部と政府との対立が外に現はれることは頗る不適当であるから政府に一任することと態度をとることに決められ、そして其の旨はつきり上奏しようといふことになりました。

即ち参謀本部は信ずるところあるけれどもこゝに意見を固執すれば政府の立場上其の辭職問題をも惹起し内外に及ぼす影響甚だ宜しくないと思ふから、本件政府に一任するといふことに致します。と云ふ意味を有するの儘上奏することとなり上奏文も出来たのであります。

所でそこで一つ奇怪なのは統帥部の名前で海軍も同じことを言はうと云ふ話で軍令部次長(古賀峯一)と結合が決まつたと聞きました。が、實際海軍の上奏は一寸時分が遅れて行つて居ります。其の内容は此方とは反対でありまして政府の意見に同意であるといふ意味になつて居ると聞きました。

堀場少佐から戦争指導班が八閩國を襲る、挺身以て國家の危急を救ふは今日に在り(堀場一雄「支那事变戦争指導史」とし、性根上奏権まで行使して「對手トセズ」声明発表を阻止しようとした真情は、この河辺回想にもよく表れてあります。

陛下 それから構和问题で何ひ度い点は南京をやる時機に何んとか事変を終結に導き度いといふ思想から南京を武力戦で圧迫した時機に、そこに構和问题を織り込ませると云ふ氣持はあつたのではないのですか。 河辺 さう云ふ氣持はありました。陛下 事實は南京が先に陥ちて仕舞ふと云ふ状況となり結局南京作戦とは別物に話を進めると云ふことになつたのですか。 河辺 初めは南京攻略以前に於て南京攻略は何時でもやり得る態勢を取つて、構和の内探査といふつもりであつたらしいのですが、それと無関係に作戦はグングン進行し南京はスルスルと陥ちました。そこで今度は首都が陥ちた以上、此処らで何んとかすると斯ういふやうなことで話が進んだと思はれます。

陛下 南京が落ちてから其の効果を利用して何んとかやうといふ考へはあつたのですか。 河辺 はい、さうです。南京が陥ちたら蔣介石も何んとか考へるだらう、彼が下野する公算は非常に多い、何と言つても首都を敵に屠られては彼が國民に対しても暴然と